

なぜ永らく研究者の間で積極的に取沙汰されることがなかったのか、その点に若干触れておきたい。一つには、やはり初期キリスト教のギリシア哲学使用の正当性に関するハルナック的な疑念が、依然として、(ギリシア哲学に由来するとみなされた上での) 神の単純性に対する軽視の動向を作り出していたものと思われる。幸いなことに、こうした動向の前提そのものが、むしろ不正確だというコンセンサスが生じつつある。そうしたコンセンサスの基礎固めに尽力した M. Barnes や L. Ayres らが登場する以前にも、神の単純性に興味を示した研究者がわずかながらいるにはいたが、彼らはその教説の整合性を否定する傾向にあった。そのもっとも顕著な例が C. Stead である。彼の影響の大きさゆえであろうか、著者の Stead に対する批判は時にやや苛烈に過ぎるきらいがあるが、その自信に満ちた筆致は個人的には痛快であった。いずれにせよ、細部にわたるまでよく練られた本書によって、マルキオンやユスティノスからアレリオス (／エウノミオス) 論争の終焉に至るまでの教父哲学史の見方が見事なほど鮮やかに刷新される喜びを是非とも味わっていただきたい、そう思わずにはいられない力作である。

Brian Stock

Augustine's Inner Dialogue:

The Philosophical Soliloquy in Late Antiquity

Cambridge: Cambridge University Press, 2010. pp. xiii + 240

上 村 直 樹

本書は、アウグスティヌスの初期著作を中心に、『告白』、『神の国』、『三位一体論』まで射程を広げ、自己との内的な対話 (soliloquy) がいかに展開したかを論じ、この対話を「霊的な修練」(spiritual exercise) として捉えようとする研究である。古代において自己の変容、治癒として実践された「霊的な修練」についてのピエール・アド氏の諸研究を踏まえ、哲学的、神学的な観点からにとどまらず、文学上の装置として対話の果たした役割が考察される。著者ブライアン・ストック氏は、トロント大学名誉教授 (歴史学・比較文学)。ケンブリッジ大学

にて1967年に学位取得後、トロント大学中世研究所のシニアフェロー、ついでトロント大学教授に就任。欧米各地の大学にて講義を担当するかたわら、古代からルネサンス期にいたる読書論を主題とする著作、読書を介した倫理の形成に関する著作を公刊している。主著ともいえる *Augustine the Reader: Meditation, Self-Knowledge, and the Ethics of Interpretation* (Harvard UP 1996) (本誌39号に林明宏氏の書評、『キリスト教文化・東洋宗教研究所紀要』17(1999)には高柳俊一氏による書評がある)のほか、それに重なる領域の著作として *After Augustine: The Meditative Reader and the Text* (U. of Pennsylvania Press 2001) (本誌47号に荻野弘之氏の書評がある)、最近にかぎっても、カリフォルニア大学セイザー記念連続公演に基づく本書に加え、*La Connaissance de soi au Moyen Age* (College de France 1998); *Bibliothèques intérieures: après Augustin et autres essais* (Millon 2005); *Ethics Through Literature: Ascetic and Aesthetic Reading in Western Culture* (UP of New England 2007) といった成果を公刊している。

全4章から構成される本書では、それに先立つ序論においてまず、アウグスティヌスの初期著作に接近する方法が明らかにされる。アウグスティヌスが、アドによって解明された「霊的な修練」の伝統を踏まえ、自己を語るという枠組みを徐々に確立することによって、言語、自己知、時間、記憶、歴史といった問題を包摂して論じるにいたったと想定されている。第1章「内的な対話に向かって」では、まずアウグスティヌスの内的な対話に関する影響が歴史的に探索される。そして、この内的な対話を、文学的、霊的、そして歴史的な視点から検証することによって、最も決定的な要因となったのは「霊的な修練」であったことが明らかにされる。歴史的な探索を通して、プラトン、プロティノス、キケロの所産が検討されるとともに、アカデメシア派の懐疑論、異教の哲学とキリスト教との緊張関係、プラトニズムの伝統における魂と身体の間接性、そして、聖書テキストへの解釈学的な接近について論じられる。著者は、アウグスティヌスの青年期においてすでに、自己を語るという枠組みが未来を志向する生と密接につながっていたこと、ゆえに自己の霊的な進展を促したのが自己内対話であったという所見を提出する。

第2章「自己内対話と自己の存在」において著者は、自己の存在を論証するため、アウグスティヌスがどのように自己内対話を用いたかという問いを設定する。まず、古代から中世、現代にいたる著述家のなかに見出される自己との対話の一

覧を示し、とりわけセネカの語りの方について言及する。それとの比較において、アウグスティヌスの対話の二つの例——『ソリロクイア』冒頭の自己との対話と『告白』第8巻の回心における自己との対話——を取りあげることによって、自己を省察するためには自己内対話のほうが外的な対話よりも一層ふさわしいと結論づける。というのは、それが理性的に知を獲得するからではなく、「外的な世界から内的な世界へ、そして、一種の超越へと向かう」(88頁)霊的な進展をもたらすからである。ついで、アウグスティヌスとデカルトにおいてそれぞれ展開した「コギト」の論証という問題をめぐって示されてきた論点が考察される(91-95頁)。さしあたって認められる類似性を踏まえつつも、この二人のあいだの根本的な差異が、言語と自己との関係において強調される。デカルトの *res cogitans* は、自己の存在を自己についての語りを抜きにして肯定することにおいて、知の確実な基盤を確保しているが、一方アウグスティヌスは、主観的な知の確実性を確保しつつ、この知と超越的なモデル、つまり神的な言葉との関係を強調するのである。実際、『ソリロクイア』、『幸福な生活』、『真の宗教について』、『神の国』、『三位一体論』といった著作を通じて、アウグスティヌスが、当初は哲学的な妥当性に基づいて自己の存在に関する論証に着手するも、創造と贖いという歴史的、神学的な語りのなかでその論証を展開するようにと変化していったことが明らかである。とりわけ『真の宗教について』以降、自己の存在を瞑想的に注視し、平静の境地を目指すにとどまらず、自己の内なるキリストの存在を認識することへ向かっている点が着目される。『神の国』、『三位一体論』にいたると、歴史的な枠組みのなかに包摂される自己は、聖書的な語りのうちに描写される。したがって、自己内対話は「すべての人の内なる神の像と類似の注入」(119頁)を介して教えられる、内的な、時間のうちに限定されない知によって、外的な対話では言表されない自己を明らかにするのである。

第3章「秩序と自由」では、自己内対話と語りが果たす役割について、『秩序論』と『自由意志論』における時間的な法と永遠の法、意志に関する議論との連関において考察される。まず『秩序論』では、自己との対話を外的なものから内的なものへ転換し、自己理解のために不可欠な基底を明らかにする理性の自律的な上昇が確認されるとともに、真理を追究するために要請された自由学芸に限界が設定される。理性的な学知の探求は、信仰と結びつくことによってはじめて成就されるからである。実際、第2章において示されたキリスト教的な契機は、内

的に自己を検証することを通してもたらされるのであり、自己内対話が外的な理性に基づく探求にまざっていることが明らかである。「対話が自己内対話に従属する」(142頁)のである。ついで著者は、『自由意志論』の議論を検討するにあたって、この著作を個別の行為に関する、また神的な予知の議論に依拠して、voluntas 概念の構築に向かい順次展開している試みだと捉えるハリソン氏の分析 (S. Harrison, *Augustine's Way into the Will* (Oxford UP 2006)) を援用する。そして、自己についての語りが時間のうちに制約されていることを示すとともに、哲学的な探求がいかに聖書テキスト、とりわけ「創世記」の普遍的な語りと結びつけられるかを論じている。

第4章「語り」において著者は、アウグスティヌスの中期を中心とした著作のなかに、時間的に制約された自己の語りという主題の展開を探る。そして、「心象、言葉、時間、記憶」との連関によって変容した内的な対話が、アウグスティヌスによる「西洋ではじめて完全に展開された語りの哲学」(181頁)を生み出したと主張し、その意義について考察する。先行する作家と比べ、生の経験という語りのなかの自伝的な要素がその哲学と神学において重要な役割を果たしていることが示されるとともに、『ソリロクイア』、『教えるものについて』から『告白』第10巻、第11巻にいたるテキストのうちに、言葉と心象についての理論的な考察、また、記憶と時間についての省察が明らかにされる。アウグスティヌスは、時間、記憶、語り、そして、自己を統合して語ることで、哲学探究のあらたな様相を開くとともに、神の救済史における人間の境位について完全に明らかにするのである。

本書において著者は、初期から中期アウグスティヌスの著作に一貫して見出される自己についての理解の試みに集中している。アウグスティヌスのこの時期の思想の一貫性を探る近年の成果 (たとえば、C. Harrison, *Rethinking Augustine's Early Theology* (Oxford UP 2006); B. Dobell, *Augustine's Intellectual Conversion* (Cambridge UP 2009)) と並べたとき、「霊的な修練」に関するアドの示唆をアウグスティヌスに適用するとどまらず、語りと自己内対話という枠組みのなかに、キケロを中心とした古典文学の所産をすぐれて継承しているアウグスティヌスを位置づける本書は、著者の該博な示唆もともなうゆえに、有益な成果であると高く評価される。しかしながら、いくつかの課題が問われるべきことも明らかである。たとえば著者は、アウグスティヌスが「執筆によって思考し、思考しつつ執

筆した」(19頁)と評する。だが、きわめて周到に文学上の装置を利用し、対話篇や回心物語を構成しているアウグスティヌスについて、この点についての論究が不足しているように思われる。また、本書の鍵となる「自己内対話」という概念についても曖昧な理解が残っていると思われる。一方では、これを内なる対話と規定しつつ、別の箇所では、より広義に「思考の企て」(124頁)、「内的な談話」(198頁)とも言表することで、読者を混乱させている。全体を貫く「自己内対話」について、テキスト上の根拠に基づいた理解がまず提案されるべきではないだろうか。したがって、本書にはいまだ仮説的な提案にとどまっていると見なさざるをえない論述が残されており、ときに引用される脚注テキストがいかにも本論を補強しているか疑問を残す箇所があると思われる。とはいえ、アウグスティヌスが「霊的な修練」という古代哲学の所産をいかに展開したかについて、今後の研究のよりどころを確保し、多大な示唆を与えているという点は最後にあらためて強調されるべきである。

Robert Wisnovsky

Avicenna's Metaphysics in Context

Ithaca, New York: Cornell University Press, 2003, pp. ix + 305

小 村 優 太

本書はイスラーム的スコラ哲学の開祖とも言える、イブン・シーナー(980-1037:ラテン名、アヴィセンナ Avicenna)の形而上学を取り扱ったものである。著者が冒頭で「Amélie-Marie Goichonが1937年に*La distinction de l'essence et de l'existence d'après Ibn Sīnā (Avicenne)*を出版して以来、アヴィセンナの形而上学を専門に取り扱った、一冊の本となるほどの長さのまともな研究はなかった」と述べているように、確かにイブン・シーナー形而上学を専門的に取り扱った研究書としては半世紀以上ぶりと言えよう¹⁾。本書は全体とし

1) 但し、イブン・シーナー研究そのものがなかったわけではない。D. Gutas, *Avicenna and the Aristotelian Tradition*, Leiden: Brill, 1988 や J. R. Michot, *La Destinée de*